

二〇二三年度 置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」第六回小論文コンテスト

優秀小論文集

二〇二三テーマ

「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、
地域の未来と私の生き方を考える」

はじめに

近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も確実に人口が減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域の安全・安心や伝統・文化の維持存続が益々懸念されます。そして、このような人口減少の要因の一つに、高校生の進学・就職で県外に出て、戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。こうした状況下において二年後に進学・就職を迎える高校二年生が、地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路を選ぶにしても非常に大事なことです。

以上のような趣旨から、「置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』第六回小論文コンテスト」を、高校二年生を対象に実施いたしました。テーマは「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、地域の未来と私の生き方を考える」です。七校から総数八十五点の応募があり、喜んでおります。応募された生徒の皆さんとご指導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。

小論文を読みますと、資料編を活用しあるいは探究学習や自分の体験や知見を基にして、この地域の未来のあり方を様々な視点から提案し、また自分の生き方を模索しており、趣旨に沿った小論文をまとめてくれました。応募者にとっては、この小論文に取り組んだ経験が将来必ずどこかで役立つものと確信しています。

この小冊子は、各小論文を六名の委員により審査を行った結果、優れた小論文とされた最優秀賞一点、優秀賞四点、入選五点を収録したものです。高校生や地域の方々に広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思います。

令和五年十月十六日

次

20 19 18 16 15 13 12 10 9 7 6 4 3 1

住み続けられる町にするために

山形県立小国高等学校 二年

飯田晴基

私の住む小国町でも、人口減少が進んでいる。先月の町報によると、六月末現在の人口は七千人を切った。さらに資料によれば、二〇四五年には現在の人口の半分以下になる。このままでは、小国町は衰退の一途を辿る。持続可能な町、つまり住み続けられる町にするために、どうしたら良いのか。

そのためには、若者が自分の町を好きになることが鍵になると考える。好きになるためには、地域と深く向き合う必要がある。

私は、小国高校入学後、探究学習や放課後活動などで、地域の魅力的な大人と関わってきた。今まで知らなかった小国町の魅力に触れ、目から鱗が落ちた。特

に、永年守り続けられているマタギ文化を知った時には、自然や生き物を大切にする尊い文化だと衝撃に近い感動を覚えた。その体験から、私はマタギ文化について個別に学び続けた。

今年の春から、私は小国町に人を呼び込む活動にも力を注ぎ始めた。小国町と小国高校では、高校魅力化の一環として、地域みらい留学という制度を整え、全国各地から生徒を募集している。留学希望者と小国町をオンラインで繋いだ説明会もある。その中で、私の今までの経験やマタギ文化に関する学び、小国町や小国高校の魅力を発信している。参加者からは「面白い文化だ」「自然が美しい」など興味を持って頂いた。他にも、マイプロジェクトとしてマタギ文化をPRする活動も行っている。地元のマタギの方々も応援してくれ、多くの人との繋がりができた。

七月には、今年もわが校主催の全国小規模校サミットを開催した。全国の小規模校の生徒が集まり、地域の魅力や課題について話し合うのがサミットだ。参加したみんなが、自分の町の魅力や課題を理解していて、自分の町への関心が高いことが感じられる。住む町は

優秀賞

学園都市推進協議会会長賞

違っていても、町の活性化や持続可能な町づくりのヒントをお互いに得られた。そこから、私の行動計画がより一層明確になり、町に貢献したいという気持ちが強まった。

八月には、サミットで知り合った仲間と、SNSでお互いの町の魅力について意見を交換した。その仲間が、来年、小国町を訪問してくれるという。他にも、狩猟免許取得を考えている山形大学の学生に、マタギ文化を紹介したところ、深い興味を示してくれた。

今、私は、私の取り組みが少しずつ広がっていく喜びを感じている。中学時代の私は、それほど地元を好きではなかったが、地域の魅力や課題を知り、発信することで地元を大好きになった。そして、私と関わってくれる若者が、昔の私と同様に、自分の町の魅力に改めて気づけたなら、地元を大好きになり、住み続けようと思うだろう。持続可能な社会づくりの動きが、日本各地に広がるはずだ。私はこの活動を続け、地域に貢献したい。私の未来はやりたいことで溢れている。

未来のふるさとを守るために

米沢中央高等学校 二年

遠藤 結依

私の夢は、保健師になることだ。そして保健師になって医療という面から自分が生まれ育った高畠町をサポートしたいと思っている。

今、高畠町では人口が減少し続けている。また、人口減少とともに少子高齢化も進行し、このままでは高畠町の魅力や活気が無くなってしまうだろう。そこで、子育てのしやすさ、医療の支援が充実した町づくりを目標にすることが重要だと考える。

人口減少は高畠町だけではなく、全国で問題視されている。高畠町では、二〇二〇年と二〇四五年の人口

変化率は六七パーセントと推定されている。まず大きな要因として考えられるのは、就職・進学などの目的で県外に出た若い世代がそのあと地元に戻ってこないことだ。なぜ戻ってこないかを考えた時私は、地元に戻らしやすさや子育てに關しての支援が少ないのではないかと思った。就職・進学で県外に出たとしても、結婚して子育てをする際に地元に戻りたくなるような医療的支援をすれば、若い世代は戻ってきてくれるのではないだろうか。

例えば、「共働き子育てしやすい街」では千葉県松戸市が第一位であり、松戸市では子育てするにあたって様々な魅力があった。子育て世帯も多く住んでいるが、保育所の定員には常に余裕があり、病児・病後児保育施設の定員充実にも力を入れている地域だ。さらに、妊婦検診時に使えるタクシー送迎の助成、託児機能付きのコワーキングスペースなど子育てへのストレス緩和の実施がされている。また、福岡県北九州市では「待機児童〇人」の実現、「二四時間三六五身体制の小児救急医療」など医療面でも子育ての支援制度が

とても充実している。このように、保育所の定員に余裕があったり、常に対応してくれる医療体制など子育てに少しでも余裕が持てるような制度があれば若い世代は戻ってくるのではないか。そうすれば人口減少にも歯止めがかかると私は思う。

そこで、高畠町では保育所の増加、医療機関による小児救急医療の二十四時間受け入れ体制をとることを提案する。保育所の増加については、待機児童がいなくなるように十分な保育所と人手を増やしたい。また、救急医療の受け入れ体制については都心よりも人手が少ないので山形県内の主要病院から始めたい。これらの支援をする事で、ＩターンやＵターンを促進できるだろう。

私はこの小論文を通して、自分でも町のイベントや行事の活気が無くなっている事に気付いた。おじいちゃんやおばあちゃんが寂しそうに昔と違うということを話している時には、悲しい顔をさせたくないと思う。昔のように活気ある町に戻したいと思っている。

活気あふれる未来のために

米沢中央高等学校 二年

長 南 穂 実

現在、私の住む高畠町は少子高齢化が進み、出生数は十四年連続減少、二〇二二年度の出生数は百人を下回るなど、深刻化してきている。全国的に少子高齢化が進む中で、どうやって若い世代を定住化させるかが鍵になってくると考える。そして、この状況を変え、持続可能な地域とするために、進学・就職等で県外に出た若者が子育てをするために戻ってきたいと思える環境を整備し、発信することが重要であると考えてる。

高畠町では、若者の転出によって二〇四五年の人口が二〇二〇年と比べて三十三%減少すると推計されている。都市部に会社や学校が集中しているため、進学・就職等で県外に転出する若者が増加する。それに

よって、置賜に残る若者・子どもを産む世代が減少し、少子高齢化につながる。しかし、資料から、山形県の正規雇用の割合は全国トップ水準で共働き率は全国二位、育児をしながら働いている女性の割合は全国四位など、全国平均を上回り、働きやすい環境が整っていることや待機児童ゼロを令和二年、三年と二年連続で達成しており、子育てしやすい県であることがわかる。このような環境があるのにもかかわらず若者の転出が多くなるのは、若者が地域についてよく考えず、良い点も悪い点も現状を把握していないということが原因だと推測した。

実際に私も、山形県がこんなに働きやすい環境であることを知らなかった。だからこそ、もっとたくさん地域について考える時間、活動を設けるべきであると思った。

そこで、学生と子育て世代の地域交流を提案する。赤ちゃんから学生、子育て世代が集まり、市町の魅力や改善点などの話し合いを通してコミュニケーションをとったり、置賜地区には子育てに対するどんな制度

長井商工会議所会頭賞

置賜の人口流出を防ぐために

山形県立長井高等学校 二年

佐^さ 藤^{とう} 三^み 咲^{さき}

や施設があるのかを知る機会になるような活動である。また、学生が小さな子供と触れ合うことによって結婚、子育てに対する関心を高めることもでき、晩婚化や晩産化の改善効果が期待できると考える。そして、交流を通して学生が自分の将来について考える機会になったり、進学で県外に出ても結婚や妊娠を機に戻って来てくれる若者が増えることも期待できる。

このように、世代を超えて交流することによって、新しいものを生み出しながら良いものを継承していく活動がこれからの時代には必要になってくるのではないかと考える。

人口減少が進む上に、少子高齢化も進み、若者減少が深刻化するこの置賜地区で、地域住民の交流を通して情報発信をすることで、若者転出の減少、転入の増加につながり、持続可能な地域に近づくだらう。私は将来助産師になって、この土地で出産・子育てに励む人々の支えになり、地域に貢献できるように頑張っていきたい。

私が住む置賜地域の人口は、二十五年後には三十四パーセント減少すると推定されている。資料2では置賜地域だけでなく山形県全体の若年層の転出超過が県人口減少の大きな要因になってくるのがわかる。では、どうすれば置賜から人口流出を防ぐことができるのだろうか。私は食文化の活性化こそが人口減少対策に役立つと考えている。

私は今年度、探究学習の一環で長井市の特産品である行者菜を用いた「行者菜プリン」をグループで開発し、「長井市の名物グルメつくりようコンテスト」にレシビを応募した。SDGsの「働きがいも経済成長も」という観点から、地元の名産品への誇りと愛着を地域

の人を感じてもらうことや、県内外への情報発信を通じて経済の活性化を図ることを目的とした。そして、たくさんの人に満足してもらうために、特産品を選ぶことに工夫を凝らした。行者菜には豊富な栄養素が含まれており、生活習慣病の予防や疲労回復に効果がある。また、プリンは世代を問わず人気のスイーツであるため、プリンに加工することで老若男女すべての方に楽しんでもらい、行者菜を知らなかった人もまた食べたくなり、長井市に足を運び魅力を認知してもらうことができるという効果を期待して作成した。

また、行者菜プリンに関わらず、多くの人が名物料理に携わり、地域が盛り上がるのが人口減少防止にも役立つのではないかと考える。他県を例にすると、青森県深浦町では「マグロステーキ丼」で町おこしをした話を聞いたことがある。地元の名産品であるマグロをステーキにして地域の各飲食店で販売するというものだが、私が興味深く感じた点は「それぞれの飲食店で食べられるものが違う」ということであった。飲食店側は店の個性として味つけや副菜に工夫を凝らし

ており、訪れた人は店舗ごとの差違を楽しみながら地域の目玉料理を楽しむことができる。そして飲食店の側でもお仕着せの町おこしメニューではなく、自分たちの自慢の料理として主体的に町おこしに関わっている印象を受けた。

私は外食の際、個人で営業している店ではなく、どうしてもチェーン店を選ぶことが多かった。若者にとって個人店は馴染みがなく、「わざわざ知らない店に行く必要はない」と考える人も多いのではないだろうか。個人店の減少は地域の方にとっても寂しいだけでなく、地域経済としても大きな損失である。そのためにも、「若者がわざわざ行きたくなる個人店」を地域一丸となつてつくり上げることが必要だと考える。その一つが行者菜プリンであり、これからの地域との協働で行う食文化の活性化である。今後、人口減少が進む置賜地域の人たちが誇りを持つことができれば、経済成長を感じられたりするような、夢と希望の持てる地域になるようにさまざまな活動に参加していきたい。

地元で働くきっかけづくり

山形県立長井高等学校 二年

鈴^{すず}木^き心^こ美^み

「オープンスクールで多くの大学を見てくるように。」そんな言葉と共に高校生活二度目の夏休みが幕を開けた。

皆それぞれ志望する学校について調べ、赴き、悩む。そして気がつく、するりと志望校を言えるようになっていく。学部は、学科は、といった質問には悩みながらもはつきりと口にするが、職業を聞かれた途端ひどく曖昧なものになる。将来どのような職に就きたいか、何に興味があるかなどを答えられる人は多いのではない。しかし、具体的にどの企業で、どの地域でとなると口を開くことができなくなる。その理由は、選択肢に溢れていて決められないのではない。その仕

事ができる場所を知らないからではないだろうか。

資料2から、山形県では県外へ進学する人数が約三分の二であることが読み取れる。そして、その人達の大部分が地元に戻ることは難しいだろう。しかし、地元に戻るきっかけをつくることならできるのではないだろうか。現在、置賜地区内の実業高校では、地元の企業三十社以上による企業説明会が実施されている。それにより多くの企業の仕事や魅力を知ることができ。また、インターンシップにより自分の興味のある企業を実際に体験することもできる。だが、進学を目指す高校には、地元の企業について知る機会がないのが現状だ。

そのため、卒業後の進路を問わず、高校生は地元の企業について広く知る機会を設けてはどうだろうか。置賜地区には一万以上の事業所がある。その中には、各々が興味を持つ分野の職業もあるだろう。しかし、そのことを知らずに他県で仕事を決めてしまうかもしれない。もし、高校生の時点で地元の企業の存在を知っていれば、県外の学校を卒業後、Uターンという形を

入 選

米沢の未来を考えたい

米沢中央高等学校 二年

鈴^{すず}木^き花^か樹^{じゅ}

取り地元の企業に就職できるだろう。職業の選択肢に加えられるだけでも数年後地元に戻る可能性が高くなる。ちよつとした情報であつても、その仕事内容に興味・関心がある人にとっては、その企業を知つて調べるときつかけになる。地方から都会へ出る理由として、仕事が多く選択肢が広いから、というものが挙げられる。確かに地方には有名な企業は多くないだろう。しかし、働き甲斐のある企業ならば地方でも候補を見つけることができる。

置賜地区においてこれからの未来が持続可能でより良い地域であり続けるためには、地元にある企業を高校生のうちから知つておき、職業選択の一つとして考えることが必要である。そして、分野に関わらずに調べたことを他者と共有し合い、広げていくことが大切だ。そうすれば、置賜地区を支える若者が増え、地域経済の活性化や雇用機会の創出など地域全体の成長につながるだろう。

私はこの米沢が大好きだ。四季折々の景色、行事を存分に味わえる。小、中学生の頃は少人数だったが、クラスの全員と充実した生活を送れた。しかし少子化の流れは変わらず、私の母校はどちらも合併してしまう。

資料3によると、山形県の高校卒業者の進学就職状況は、県外へ進出する人の割合が増え、人口は減少の一途を辿っている。総務省によると、人口流出の主な原因は若者にとって魅力的な就業機会の不足だとされている。また、文部科学省の調査によると、公立学校の廃校は十八年間で約千校発生しており、山形県も二百校以上廃校になっている。こうした若者の流出と少

子化により、地域の活力低下が懸念されている。そこで、米沢に活気をもたらすために二つの提案をしたい。

まず、廃校の有効活用である。現在も廃校数は増加傾向で、今後更に学校跡地の有効活用が求められるはずだ。例えば、静岡県伊豆市で宿泊施設として再利用された廃校は、プールを温泉にするなどの工夫を施し、高い人気を誇っている。こうした施設は観光客の注目を集め、定住化のきっかけや地域振興にも繋がる。もし米沢で設置する場合、学校の姿はそのままで、食事は旬の食材や郷土料理を含んだ給食として出せば、懐かしい雰囲気を楽しめる上に地産地消にもなる。更に、体育館でローカルヒーローやご当地キャラクターのショーをすれば、子供たちも十分に満喫できる場所になるだろう。そして、私たち学生が積極的にSNSで宣伝することで、地域が主体となった町おこしになると思う。

次に、地元にある職業をより多くの学生に知ってもらうことが必要だと考える。人口流出の原因に魅力的な就業機会の不足が挙がっていたが、「置賜の概況」

によると、五年間の有効求人倍率はほぼ一を上回り、求職者に有利な状況であることがわかる。つまり、就業機会は充実しているのだ。しかし、進路決定を迫られ焦っている学生は、憧れの都市での就職に目が行きがちで、地元の職業をあまり知らずに県外へ進学、就職してしまうことが多い。実際に私も都市に強く惹かれ、地元には私の望む職場が無いと思い込んでいた。そんな時、学校の活動で職業体験があった。実際に職場の人と接し作業するうちに、ここで働いてみたい、もっと知りたいと思うと同時に、こういった活動が増えて欲しいと感じた。そこで、高校生による職場のPR活動を提案する。職業体験や調べ学習で得たことを小、中学生に紹介することで、より多くの生徒がその職業に興味を持つことができる。これにより、年齢を超えた交流や生徒の主体的な進路選択に繋がるはずだ。

私の故郷はまだまだ知られていない魅力と可能性に溢れている。伝統と美しい自然をいつまでも後世に残したい。そのために、私も地元の一人として米沢の未来を考えていく。

高島町の未来のために

山形県立高島高等学校 二年

木^き村^{むら}吏^り希^き

「出生数が減少している。」私の住んでいる高島町の大きな課題の一つだ。

高島町は年々人口が減少し、最近では五年で千人を超える人口が減少している。人口減少の原因は様々だ。その中でも私は、出生数の低下が一番気になっている問題である。私には姪と甥がおり、高島町の出生数が年々減少しているのはよく耳にしていた。実際に、私が生まれた年と現在の出生数を比べてみると、約半分の数まで減少していた。私は自分の住む高島町のことについてあまり関心を抱いておらず、町のことについて考えることなどなかった。しかし、高島町役場でインターンシップを体験したことがきっかけで、町のために私にできることはないかと考えるようになった。その体験の中で、出生数が減少しているという問題に

ついて様々な対策を行っているということを聞いて、この情報をさらに多くの人に伝えていくことが重要なことなのではないかと感じた。

高島町では子育て支援が活発に行われている。保育料の減免や医療費助成などといった支援を積極的に行い、経済的な面での負担軽減に取り組んでいる。また、子育て支援医療給付制度では、零歳から十八歳の子供の医療費が無料になるという制度もある。さらに経済的な支援だけでなく、心の支えになる相談支援体制も整っている。子育て世代包括支援センターでは妊娠・出産から子育てといった、分からないことが多く不安や心配な気持ちのある期間に精神的な面でもサポートしてもらえる。このように高島町では様々な子育て支援が行われている。高島町で子供を産み、育てていきたいと思ってもらえるようにするには多くの人に知ってもらふ必要がある。そのためにはSNSを活用した広報活動が有効なのではないかと思う。SNSを使うことで、今の世代の方々に広く知ってもらえる手段になるはずだ。高島町役場などのホームページで制度に

ついで紹介していただくだけでなく、インスタグラムやX（旧ツイッター）などの、より若者の目に入りやすいアプリケーションを使うことで、より多くの人に知ってもらえるのではないかと考えた。

私は将来、高畠町のためにしたいことがある。私の夢は管理栄養士になることだ。子育て支援の中で、子供の食事の栄養面でのサポートをしたい。それだけでなく、出産を控えているお母さんたちの食事もサポートすることができたら、母子ともに充実した支援ができるのではないかと考えた。また、子育て支援だけにどまらず、高畠町に住んでいる人たちの食事を改善して、少しでも健康になつてもらい、高畠町を人から活発にして盛り上げていけるきっかけをつくり、高畠町に貢献していきたい。



友 達

山形県立小国高等学校 二年

澤^{さわ} 田^だ 旭^{あさひ}

私はその時、大きな達成感と充実感で満たされていた。

今年の七月、私は、小国高校主催の全国小規模校サミットという、自分たちの地域と未来を考えるイベントにおいて、メインファシリテーターという全体進行役に立候補した。一番大変な立場になって自分の力を試してみたかったからだ。全国から百二十人以上の高校生が申し込みしてくれた。

運営の中心となるコアメンバーで決めた目標は、「課題をシェアし、自分や、地域にとつての新しい価値を見出そう」だ。私は、仲間とともに、どうすれば目標を達成できるか考えた。その中で、私が大切だと実感したことがある。それは、人に頼るということだ。

地域留学生として小国高校に入学していなかった

ら、私は恐らく「そんなこと知っているよ」「そんなこと誰にでもできるよ」と言っていただろう。知識として理解しているだけのことを、あたかも体験しているかのように話したはずだ。そうならなかったのは、小国高校や小国町での生活による。ここでは体験的な学びが多い。今までは単なる知識でしかなかった考え方が、体と感情の動きを伴って、確かな価値観として体得できる。そして、「人と関わることは楽しい。自分のやりたいことにチャレンジしていい。」と心から思えるようになった。この経験から、メインファシリテーターへの挑戦を決めたのだが、準備の段階で、何度人も人とぶつかり悩んだ。私は足手まといだからやめたほうがいいと思ったこともあった。しかし、そんな時、いつも友達が助けてくれた。「旭は、旭にしか出来ないことがあるから一緒に頑張ろう！」その言葉から、私は、仲間が自分を信じてくれていることに気がついた。その仲間を信じて頼ろうと、心から思った。

当日は、みんなで協力しながら、いつも以上の明るさで行動した。みんな明るく話し合えるような雰囲気

を作れたかったのだ。その結果、高校生の参加者だけでなく、大人の人達も楽しみながら意見をたくさん出しているのがわかった。その表情はとても明るかった。

その時、私は「町づくりの理想型がこれだ！」と思った。町の住民達がみんなで笑顔で話し合いながら、自分達の町を作って行く。その合意形成のプロセスとしてこの話し合いのやり方は最適だ、と。自分の理想が固まったその時、大きな達成感と充実感で満たされたのだ。

このような取り組みをしている小国高校や小国町は、理想的なところだ。小国町は、地域の大人との距離が近いうえに、大人達が私たち高校生の意見に真剣に耳を傾けてくれる。だから、自分の意見も言いやすい。このようなステキな町は、小さい国ではない。小国という持続可能な町なのだ。私は、卒業後も小国町に住み、地域に貢献していくつもりだ。

置賜の

持続可能な未来をつくるために

山形県立興譲館高等学校 二年

加藤 碧人^{かとう あおひと}

近年、進学や就職を理由に二十代前後の若者が県外へ流出している。私が通う学校でも、同様の現象が起きている。置賜地区の将来推計人口は、二十五年後は二〇二〇年の人口の約三分の二になると予想されている。その背景には「一度出たら戻らない」状態があるようだ。そのような状態を改善し、持続可能な地域づくりをする際に私が焦点を当てたいのが、家庭を築いた二十代や三十代の若者層である。家庭を築いた若者層の人々が、子育てをきっかけに、地元に戻ってきてもらうために、子育てをしやすい置賜として地域ブランド化を目指したいと考える。

私は以前、学校の探究活動を通して、置賜にはたくさんさんの地域特産物があることを知った。しかし、売り

切れなかった場合は処分されていることも同時に知った。さらに、処分する際にも働き手が必要である。今後の働き手不足問題も相まって、このままではせっかくの地域特産物が惜しい物になってしまふ。そこで、置賜の人口減少を抑えるために、売り切れなかった地域特産物を、家庭を築き置賜に戻ってきた若者層の世帯に対して無償で支給することを提案する。

県内では東根市でも転入した世帯に向けて類似した政策を実施しており、近年人口減少を抑える事ができている。東根市の実践を踏まえ、米沢ABCをはじめ数々の地域特産物がある置賜に合わせ、取り組むことで成功を期待することができる。

支給を受ける側である若者層の世帯にとってみれば、物価高騰が続く今、地域特産物を無償で支給されることは、家計の支えとなる。また、この政策を広めることで、県外の若者層の地元に戻るきっかけにもつながるのではないだろうか。さらに、行政が地元農家と若者世帯の仲立ちをすることで、支給の回数を継続的に行うことができる。将来的にも支援を続け、子育

てをする若者層の経済的な支援が強固となり、在住意識も維持でき、持続可能な地域にすることにも発展する。

しかしながら、この政策案だけでは、久々に置賜へ戻ってきた若者層は、慣れない環境変化に対して不安を抱いてしまうという課題もある。そのような不安を解消できるように、地元の人と不安を共有し、そこで地域特産物の支給を受けることができるようなイベントを開催したり、人とのつながりを図るコミュニティを作るなど、子育てをする若者層を精神面でも支援する政策も考えるべきだ。また、政策の情報が周知されなければ、持続可能な地域づくりはできないため、県外の若者層に対しての情報発信も重要であると考える。

私は、将来どのような進路を歩むのかまだ分からない。しかし、置賜の持続可能な未来をつくるために、日頃から発信される置賜の情報を収集して、今ある課題の解決や地域ブランド化に尽力していきたい。

グローバル化とこれからの置賜

米沢中央高等学校 二年

小林 美桜こばやし みお

人口減少社会の中、持続可能な地域を実現するためには、何が重要であると考えられるだろうか。私は、グローバル化が進む今、私たちにとって最も需要があるものは、英語教育であると考えている。

以前私は、高校生の国際交流プロジェクトに参加した際に、外国人との交流を通して、自分から英語を話すこと、生きた英語に触れることの大切さを身をもって体験すると共に、言語が秘めている可能性に気づいた。冒頭でも挙げた通り、現在世界ではグローバル化が進んでいる。世界共通語である英語を習得することで、日本人以外の人とコミュニケーションをとることが可能となるだろう。つまり、人との繋がり、結びつきが強くなることに伴い、それが置賜と世界の繋がりになるのではないかと私は考える。

資料を見ると、高校卒業後の進学者数の県外流出は人口減少の大きな原因の一つであると推測することができる。私思うに、そもそも置賜の教育機関では学べる分野の幅が狭く、限りがある。そこで論点をそこに置くのではなく、違う方向からアプローチすることが必要になってくるだろう。高校卒業者の県外流出を防ぐことは、現状として難しいと仮定した上で、Ｕターン、Ｉターン移住者を確保することで、人口減少に歯止めをかけたい。そこで私は、これから需要が高くなるであろう子供の英語教育に力を入れることを提案する。まずこれを実現させるには、子供たちが英語に関わる環境を増やしていくことが最も重要である。例えば、学校で一つのクラスに二人以上の担任を配置する複数担任制を導入し、そのクラス担任にALTを採用することや、置賜の市町村の海外姉妹都市との交流を積極的に行い、交換留学生を受け入れるなど、常に子供たちが英語を聞いたり、話したりすることで、生きた英語と触れ合える状況を、半強制的に作ることで、英語が挙げられる。さらに、このような活動と共に、「英

語なら置賜地域」のキャッチコピーを掲げることで、置賜の魅力を知った県外からの移住者が増加することが期待できるだろうと私は考える。

今、置賜地域は人口減少の渦中にあるが、それに歯止めをかける方法はいくらでもあるはずだ。置賜地域に住む人は、もう一度この問題に目を向ける必要があるだろう。私は将来、語学力のある人間になり、自分の知見を広め、自分が生まれ育ったこの置賜に貢献できる人間に成れるよう努力していきたい。



第六回の小論文コンテストには、七校八十五名の方々が応募してくださいました。今回初めて応募してくださいました高校があり、これで置賜地区十四高校すべてが一度は応募してくださいましたことになります。回を重ねるごとに、課題の論点が適切に把握なされてきているように感じます。

このコンテストのそもそもの原点は、少子化の要因の一つが「若者流出」にあり、当事者である生徒たち本人がこの問題をどう受け止めているのかを聞きたい、この問題に取り組んでもらいたいというものでした。国全体の少子化と、進学先や就職先が県内では限られているため相当数の若者が県外に出ざるを得ないことが、人口減少や所によつては過疎化に繋がっていくことが共通理解になっていきます。

この人口減少を食い止めるための方策としてはＵターンの促進があげられ、Ｕターンを推進する方策としては、郷里の魅力の発信や住みやすくして戻ってきてもらうための改善策の提言が主になっています。しかし、問題点の認識や方策の幅や深さには、その生徒が置かれた状況により大きな違いが出てるように思いました。

資料編のデータやSNSを用いれば、問題点が把握でき、提言にまとめることができます。これに、自分の考え方や独自の創意工夫を盛り込んでいきます。なかでも、探求学習での考察とインターシップやボランティア活動の実体験からの発想は、説得力や深みを感じられ、自らの関り方が具体的であり、自分の将来をも踏まえて実感をもつて記述されているように思いました。

「少子化という言葉は知っていたが、この課題に取り組んで初めて地域の実情を知って驚いた」という声も多く、このように地元の現状を知り、自身の将来を考えるきっかけになっていることに、小論文コンテストの意義を感じます。続けて取り組んでいきたいと思います。

審査は応募要領に記した五つの観点から行っていますが、その一つである「表現力」は「字は大きく、鮮明に書く」ことを求めており、大変きれいで読みやすいものが多かったと思います。中には文字の大きさと濃さが足りず、読みにくいものや誤字も見受けられましたので一層の努力をお願いします。

高校生にとって「地域の未来と自分の生き方を考える」という課題に取り組むことは大きな意義があります。学校側においても探究学習等を通して、論文の書き方も含めご指導いただければありがたいと思います。

置賜地区高校生「地域と私たちの未来を考える」第六回小論文コンテスト 募集要項

一. 趣 旨

少子高齢化と共に近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が確実に減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域全体の衰退に結びつくものと懸念されています。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て、戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか。二年後に進学・就職を迎える皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大事なことです。当コンテストは高校生の皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願い、実施するものです。

二. テーマ 三. 対象者

四. 応募規程

「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、地域の未来と私の生き方を考える」
置賜地区高等学校二年生

①募集要項の資料編や独自の資料を参考にして、テーマについて考えをまとめください。また、各自の題名を付けてください。

②文字数は一二〇〇字以内（四〇〇字詰め原稿用紙三枚以内）

③原稿用紙は縦書きに、一行目に題名、二行目に学校名・氏名、三行目から本文を書いてください。題名、学校名・氏名も字数に数えます。

④使用鉛筆はHB又はBを用い、字は大きく鮮明に書いてください。

①観察力 現状を注意深く見て学習し気づきを得ているか。

五. 審査の観点

六 応募先
七 募集締切

②提案力 独創性に富み前向きな提案であるか。
③主体性 自分が課題解決にどのように具体的に関わっていくか。
④論理性 客観的、合理的な論理展開ができているか。
⑤表現力 誤字脱字がなく、言いたいことを十分に伝えている文章であるか。
この五つの観点を踏まえた小論文を書いてください。この観点で評価します。
各学校の担当者まで
各学校で指定する期日まで

八 表彰
九 表彰式

各学校から米沢有為会米沢支部事務局への提出締切日 九月五日(火)「必着」
最優秀賞一点 優秀賞四点 入選五点
十月二十八日(土) 米沢市内ホテルにて

十 審査委員長
十一 主催・共催
十二 後援・協賛

米沢有為会会長 平山英三
公益社団法人米沢有為会 学園都市推進協議会
置賜総合開発協議会 置賜地区高等学校校長会 米沢商工会議所 長井商工会議所
米沢信用金庫 NCV株式会社ニューメディア



(注) この募集要項・資料編や今までの優秀論文を右のQRコードからご覧になれます。

資 料 編

■ はじめに、山形県及び置賜地区の人口の動きを、将来推計人口(資料1)と、令和3～4年の県外転入・転出状況(資料2)の二つの視点から見てみましょう。

資料1 山形県及び置賜地区市町別の将来推計人口

	2020 年	2025 年	2035 年	2045 年	人口変化率 2045/2020 (%)
山形県	1,072,473	1,015,910	897,075	768,490	72.7
米沢市	81,986	77,483	67,817	57,720	70.4
長井市	25,857	23,918	20,160	16,377	63.3
南陽市	30,715	29,017	25,494	21,762	70.9
高畠町	22,546	21,131	18,214	15,115	67.0
川西町	14,228	12,783	10,148	7,655	53.8
小国町	6,931	6,059	4,517	3,220	46.5
白鷹町	13,030	11,918	9,839	7,797	59.8
飯豊町	6,618	5,956	4,755	3,620	54.7
置 賜	201,911	188,265	160,944	133,265	66.0

出典：国立社会保障・人口問題研究所

置賜地区では、2045年の人口が2020年と比較して34%減少すると推計されています。

資料2 山形県（置賜）の県外転入・転出状況（令和3年10月～令和4年9月）

※若年層とは15～24歳

山形県の県外転入(置賜) [a]		山形県の県外転出(置賜) [b]		山形県の転出超過(置賜) [b-a]	
若年層(置賜)		若年層(置賜)		若年層(置賜)	
14,484 (2,646)	4,395 (779)	17,705 (3,155)	7,086 (1,352)	3,221 (509)	2,691 (573)

出典：令和4年山形県の人口と世帯数

令和3年～令和4年の山形県(置賜)の県外転入・転出状況は、3,221(509)人の転出超過です。

また、山形県(置賜)の若年層(15～24歳)の転出超過は2,691(573)人となっており、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者の転出超過が多く、県人口減少の大きな要因の一つになっています。

資料3 山形県の高校卒業者の県外への進学就職状況

	卒業者数	大学等進学者 数(うち県外)	専修学校進学者 数(うち県外)	就職者数 (うち県外)	計 (うち県外)	県外の 割合
令和3年度	9,381	4,355 (3,142)	1,858 (1,122)	2,566 (513)	8,779 (4,777)	54.4%
令和4年度	8,998	4,450 (3,251)	1,726 (1,030)	2,272 (449)	8,448 (4,730)	56.0%

出典：令和4年度学校基本調査卒業後の状況調査山形県結果について

令和4年度の高校卒業者のうち、およそ56%が進学や就職で県外に出ています。

■ 置賜地域とはどのような地域でしょうか。それに関連する資料として、置賜総合支庁作成の『令和4年度置賜地域の概況(令和4年7月)』があります。

資料 [r4okitamagaikyo.pdf\(pref.yamagata.jp\)](http://r4okitamagaikyo.pdf(pref.yamagata.jp))

また、山形(県)には、ゆとりのある暮らしと充実した子育て環境があります。「山形県の暮らし」から見てみましょう。

資料 <https://yamagata-iju.jp/pref/number.pdf>

次に、日本全体の「少子化の現状」と「地方からの人口流出の背景」を国の白書(いずれも URL)から見てみましょう。これらの資料は少し難しいかもしれませんが、挑戦してみてください。

(1) 日本の「少子化の現状」

内閣府資料 『少子化対策白書(平成29年度)』第1部少子化の状況及び少子化への対処施策の概況 第1章少子化をめぐる現状
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2017/29webgaiyoh/html/gb1_s1-1.html

(2) 日本の「地方からの人口流出の背景」

総務省資料 『情報通信白書(平成27年度)』第2部 ICTが拓く未来社会／第3章地域の未来と ICT／第1節地域の企業と ICT／
1 地域経済の現状と ICTの可能性／「地方からの人口流出と東京圏への集中」「人口流出の背景」
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc231120.html>

■ 人口減少の一因である「若者流出」等の状況を統計データで見ましたが、これに歯止めをかけるさまざまな対策が講じられています。それらの取組を紹介しましょう。

資料4

置賜圏域の将来像・行政施策「置賜定住自立圏共生ビジョン」の取組例

置賜圏域は、歴史的背景や地理的要因から、行政区域を越えて生活圏を共有し、経済、教育、文化などの面で深いつながりを持ちながら発展してきた。これまで圏域内の各市町は、それぞれが活力ある地域づくりを実現するため、様々な取組をしてきたが、人口減少や高齢化は急速に進んでおり、今後もこうした傾向は続くものと予測される。この状況下で、地域の活性化を図り持続的に発展していくためには、単独自治体での事業展開には限界があることから、広域で連携し、効果的、効率的に行政運営を行うことが必要である。こうした認識のもと、置賜3市5町は、それぞれの独自性を維持しながら、地域の魅力をしっかりと磨き、その上で様々な分野において連携を深めつつ、住民の暮らしに必要な諸機能を圏域全体として確保することで、住民が暮らしやすい、活力ある圏域を創造し、共存共栄を目指す取組を行う。それが「置賜定住自立圏」というもので、米沢市が「中心市」、2市5町が構成市町となり協定を締結し、共生ビジョンに基づいて連携事業を推進する。具体的な取組として①生活機能の強化(医療、福祉、教育、産業振興、環境、水道、消防・防災)、②結びつきやネットワークの強化(交通、移住・定住・交流)、③圏域マネジメント能力の強化(職員等の交流)の3つの政策分野で取組を行う。

出典：米沢市 「広報よねざわ」 2019.5.1

資料5

若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組の紹介

【事例1】 山形県と大学等との UI ターン就職促進協定 28大学等と協定を結ぶ

山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等について、大

学等と連携して取り組むことにより、Uターン・Iターン就職の一層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。

＜協定締結大学 令和4年11月30日現在＞ 東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、国士舘大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、帝京大学短期大学、明治学院大学、立正大学、拓殖大学、立命館大学、法政大学、千葉商科大学、神奈川工科大学、関東学院大学、東京工科大学、日本工学院専門学校、日本工学院八王子専門学校、日本工学院北海道専門学校、東北学院大学、東北工業大学、東北福祉大学

出典：山形県雇用・産業人材育成課

〔事例2〕 やまがた就職促進奨学金返還支援事業の実施

大学等に在学中の方を対象として、県と市町村が連携して奨学金の返還の一部を支援する事業。米沢有為会、長井教育会、飯豊町も市町村枠で実施。平成27年度から始まり今年度も継続。要件や手続き等については、山形県の「やまがた就職促進奨学金返還支援事業」をご覧ください。

出典：山形県産業創造振興課

〔事例3〕 高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組

置賜地区雇用対策協議会（行政機関〔米沢市・南陽市・高畠町・川西町〕やハローワーク等が連携し、若者の雇用安定を目指す団体）が、模擬面接会（高校3年生を対象）や企業説明会（高校2年生の就職希望者に向けて企業動画を制作）、新規学卒者ビジネスマナー講習会や新入社員フォローアップセミナーなどの諸事業を実施している。求人・求職者の両面からサポートし、雇用の確保と定着、就職支援に取り組んでいる。また、高校1年生を対象とした職業体験会（WAKU WAKU WORK）の開催など、進学者を含め地元にいるうちに地元企業を知ってもらう事業についても展開している。

〔事例4〕 各高等学校における多様な取組

各高等学校においては課題研究や探究学習における地域学習の展開や、職場見学・体験、インターンシップの実施などを通して、郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。

〔事例5〕 働く人の様子・思いなどをSNSで発信

米沢商工会議所が、若手社員や経営者などへのインタビューにより地域で働く魅力を発信する「よねざわのわわわ」〔URL: [米沢商工会議所 \(jinzaikakuho-yamagata.info\)](http://jinzaikakuho-yamagata.info)〕プロジェクトを企画・実施。高卒就職者や県外大学へ進学後のUターン、他地域からのIターン事例など幅広い情報をインスタグラムや動画などで発信している。

＜米沢有為会からの一年早めの情報＞・・奨学金と学生寮の募集案内

米沢有為会では、皆さんが再来年大学等へ進学した後の学生生活を応援するために

① 3つのタイプの奨学金（貸与型：女子向け住居費補助奨学金2万円と一般貸費奨学金4万円、減免型：地元若者定着奨学金4万円条件を満たせば2万円減免 いずれも無利子）と

② 東京と仙台に男子学生寮（平日朝夕2食付き、個室、月6.5万円程度）を用意しています。

今から情報をゲットしてみてください。

詳細は米沢有為会 HP で（QRコードからどうぞ!）



二〇二三年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」

第六回小論文コンテスト

優秀小論文集

発行日 二〇二三年十月二十五日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 平 山 英 二

〒二八二〇〇四 東京都調布市入間町一―三六

東京興譲館内

電話・FAX 〇三―三三三〇九―三三〇二

ホームページ: <http://www.yonezawa-yuika.org/>